ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　見渡す限り、青い光景が広がっている。

　朝日を浴びながら、一行はクルーザーに揺れていた。向かっているのは、白や優が仕えている人物が所有する別荘である。雅也、拓馬、良助、奈央、そして白は知らないのだが、どうやら田島辰巳はその人物と古くから面識があるようだった。

　いや、それだけでは無い。

「ねえ、白」

　クルーザーの操縦席で、辰巳と優が何やら話し込んでいるのを見ながら、拓馬が声をかける。

「僕達の師匠と、優さんって、元々知り合いだったの？」

　拓馬の目には、二人が楽しそうに会話をしている所が写っていた。会話は聞こえないが、どう見ても、合宿のプログラムについての事や世間話をしているようには見えない。どちらかというと、昔の思い出に花を咲かせている感じだ。

　白もそれを見て、首を傾げていた。

「いえ……僕は何も聞かされていませんね。お力になれず、申し訳ございません。相川様」

「い……いや、気にしないで。というか、『相川様』ってなんかむず痒いから、普通に『拓馬』って呼んでくれていいよ」

「そうだな。俺も『良助』でいい」

「然様でございますか？　では僭越ながら……」

「ていうか」

　良助が苦笑する。白の会話をしていると、体中がゾワゾワして我慢できなくなっていた。

「そういう堅苦しいのは無しでよくね？　これから一緒に合宿に参加するんだしさ」

「そうだね」

　拓馬も良助の言葉に首肯した。

「普通に雅也と話している時みたいな感じでいいよ。寧ろ、そうしてくれた方が僕達も嬉しいよね、良助」

「だな。つーか、雅也なんて歳が一個上の俺達にタメ口で話してるし、言葉遣いなんか気にしなくていいわな」

「は……はい！　分かりました。そうさせていただきます！」

　白はそう言って、笑顔を見せる。それを見て、拓馬も良助も、ようやく落ち着くことが出来た。やはり二人としては、仰々しいい態度は気疲れてしまうのだ。たった数十分話をしただけだったが、それがよく分かった。

「そういえば、僕雅也の友達と会うの楽しみにしてたんだよね。だって、雅也は学校での話とかあまりしてくれないじゃん？」

「だな。口を開けばポケモンバトルの事ばっかりだしな。友達も、兄貴的な立場にいる俺としては、ちゃんと上手くやっているのかどうか気になっていたところだし」

「そうそう。教室が正反対の方向だから、僕も見に行けないし。道場に連れてきた友達なんて、太一と神楽の二人だけでしょ？」

「あー！　もう！　二人共、うるさい！」

　恥ずかしくなったのか、雅也が叫んだ。それを見て、クスクスと白は笑う。

「ええ。僕も雅也の修行仲間に会うのは楽しみにしていたんですよ。たまに二人の話を聞かされていたもので」

「ほぅ。そりゃなんか気になるな。一体どういう風に伝わっているのかね」

「良助はテクニシャンな戦い方を好む方で、拓馬はディフェンスが主体の戦い方を好む方だと聞いています」

「学校でもポケモンバトルの話……」

「だって……皆が楽しめる話題って、それくらいしか思いつかないんだもん」

　呆れたような視線を向けてきた拓馬に、雅也は思わずそっぽを向き、小さな声で呟いた。

　そんなこんなと話をしていると、クルーザーが止まった。彼等の目には、少し遠くの方に大きな、西洋風の白い屋敷が見えていた。あれが別荘だろう。

　ここは、白や優の仕えている主人の所有する島である。島全体は丁度、田島道場の五倍の面積だ。

　陸に上がった一行が少し歩くと、黒光りする、三メートルはあろうかという、大きな門が見えてきた。優が指をパチンと鳴らすと、その門がギギギと音を立てながらゆっくりと開いていく。

「やべえ、ちょー格好良い……」

　拓馬の横にいた良助が、思わずそう呟いた。

　開いた門の先には、芝生が広がっている。黄緑色の世界に石灰で線が引かれ、それがポケモンバトルのフィールドであることを表していた。

　そしてその芝生を分断するように、アスファルトで舗装された道が、屋敷まで真っ直ぐ伸びている。

「ほう……」

　そのバトルフィールドを見て、田島辰巳は感心したような音を出す。芝生は一目で分かるくらい、丁寧に手入れされていたからだ。

「流石は一さんだ。ここなら、公式戦のバトルフィールドに選ばれてもなんら不思議は無いレベルだな。しかも、それが四つか」

「お気に召しましたか？」

　主人を褒められて嬉しそうに、優さんが言う。

「ああ。きちんとした公式戦のフィールドで戦った事は、この子達も無いのでね。いい経験になるだろう。俺達にはちょっと広すぎるのが難点だが」

　嬉しそうなのは田島辰巳も同じだった。そろそろ、こういうところでポケモンバトルをさせてみようと思っていたところだったのだ。辰巳は話を持ちかけてきた人物から予想はついていたのだが、『設備が整っている』という雅也の友達の言葉に嘘はないらしい。

　一行は、優に案内されるまま、屋敷まで続く道を進んでいった。